

「二度書き」OK —当世イランの 書道事情

阿部尚史

●イラン人の書の心—
ナスタリーク体へのこだわり

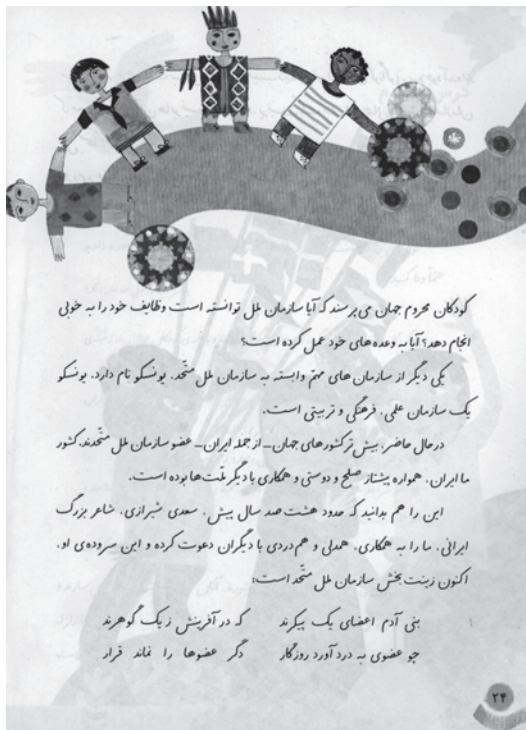
イランでは、一般にアラビア文字を用いたペルシア語が用いられる。特にナスタリーク体という書体を好んで書く。このナスタリーク体は一四世紀頃に既存の書体を組み合わせたという。曲線美にあふれる流麗な書体であり、イランだけでなく、インドや中央アジアにも広まった。現在もパキスタンでは、新聞がこのナスタリーク体を用いているほどである。イランでは通常の出版物は、読みやすいがやや美しさでは劣る「ナスフ体」という書体で印刷されている。イラン人のナスタリーク

ク体への執着は相当なもので、子供たちがこの書体に親しみ書けるようになるため、小学校から「国語」の教科書はナスタリーク体で記される（写真参照）。実際に、イラン人のほとんどはボールペンでも鉛筆でもナスタリーク体で書く。イラン人と文通をしようと思ったら、ナスタリーク体が読めなければならない。

●イラン書道教室体験—二度書きOK

一四世紀に生まれたナスタリーク体はイラン人に愛され、従って、それ以降の手稿本や古文書はこの書体で書かれることが多い。私は一九世紀のイラン史を研究しているため、当時の古文書や古写本を読解するために、ナスタリーク体や、さらにそれを崩したシェキヤステ体に慣れ親しまねばならないと感じていた。

そこで、二〇〇三年から二年半ほどイランに留学した時、古文書が読めるようになるかもしれない！とやや短絡的な発想からイランの書道を学ぼうと決意した。偶然が重なって、イランでも大変有名な書道家であるエスラーフィール・シールチー先生に習うことになった。イラン（やアラブ圏）の書道は、伝統的にはネイと呼ばれる葦の先端を削って墨をつけて書く。日本や中国の毛筆による書道とは異なる。私は子供の頃、習字教室に通ったことがあったし、また中学校でも習った。そこで先生



イランの小学校4年生の国語（ペルシア語）の教科書より

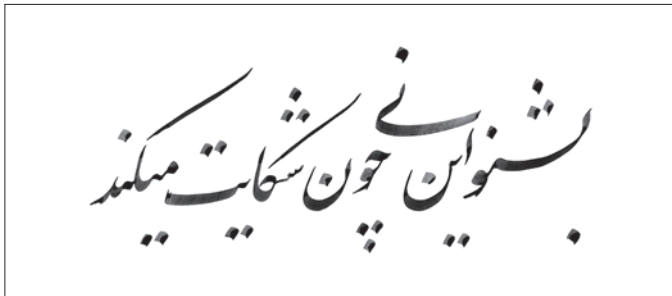
よく言われたのは、「二度書きは絶対に駄目」だった。二度書きした箇所は、墨のにじみや濃淡の差異から後でわかる。この「原則」には、擦れの美しさを味わう日本人の美意識や、一度の機会を大切にするという「潔さ」が表れているのかもしれない。とにかく、日本の子供たちには「二度書き御法度」がたたき込まれているはずである。

イランの書道では、二度書きはOKである。先生もほとんど二度書きする。三度書きだつてざらである。二度書きしたことが墨の濃淡からわかっても構わない。一度しか書いてはならないという原則はない、形を整えることこそ重要！毛筆と

聞け、この箏笛がいかにかい嘆くのかを

（ルーミー〈モウラーナー〉『精神的マナヴィー』の第一句目）

【ナスタリーク体】



【ナスフ体】

بشنو این نی چون شکایت میکند

風を積極的
そうした作
私の先生も
品が製作さ
れいている。
み込んだ作
な要素を組
より絵画的
けでなく、
らの作品だ

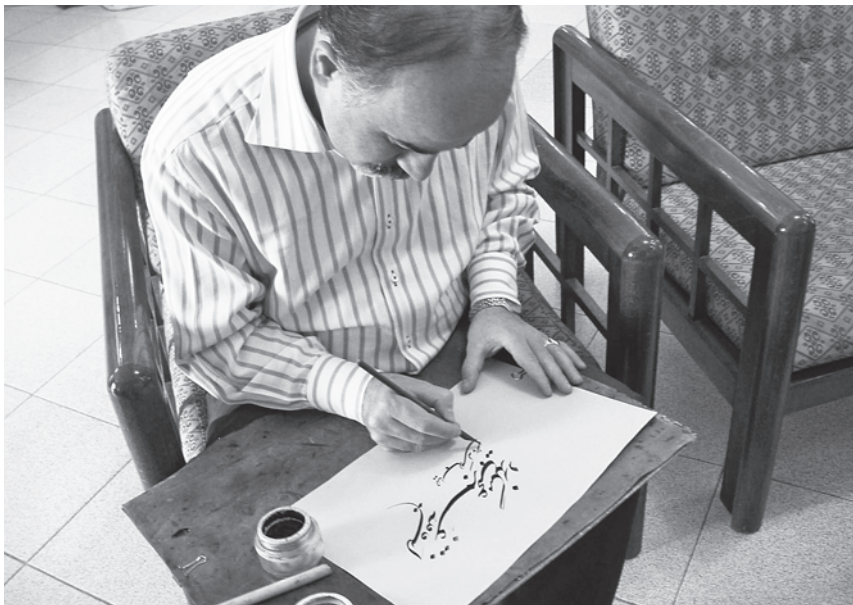


シールチー先生の作品。白黒でややわかりにくい、金をまぜた絵の具で書かれている。

●最近のイラン書道の流行と展覧会

異なり、葦の筆では、墨のつきが不十分で擦れることもしばしば。そうしたときには迷わず二度書き三度書きで、形を整える。

ちなみに私は、先生のアトリエに通って習っていたが、毎週水曜日の午後に、先生が教えている教室に通ったこともあった。イランの書道教室でも日本の教室と同じように添削をしてもらう。日本では先生が淡々と朱墨で直すという印象があった。しかしイラン人はおしゃべりである。添削しながらしゃべりまくる。五人しか並んでいないのに、私が添削してもらうまでに、なんと二時間近くかかったことがあった！ 書道教室の後に予定していた用事がキャンセルになったことはいうまでもない。



エスラーフィール・シールチー先生。手にしているのが葦の筆

に広めている旗手である。紙ではなく、キャンバス地に書き、さらに油彩絵の具で周囲を彩る。さらに墨のかわりに金色の絵の具だつて使う。これが「絵画的書道」と呼ばれるイラン書道の最近の流行である。（裏表紙も参照）ここ数十年ほど、イランでも経済自由化により富裕層や中間層が多く生まれている。派手好きな彼らの広いサロンを飾るために、私の先生も次々に作品を製作し、ギャラリー、美術館、さらには瀟洒な個人邸宅を借りて展覧会を開いていた。

●イラン人の書道作品とイラン・イスラーム体制、湾岸諸国

イラン人の書道ではハーフェズ、サアディー、ルーミー（モウラーナー）といった、一三、一四世紀の有名なペルシア語詩人の作品を書くことが多い。書道教室でも、芸術作品でも同様である。一方、私の先生だけでなく、他の書道家の知り合いも、スルス体という「厳粛な」書体を用いてイスラームの聖典『コーラン』の章句を書き作品にしていた。装飾も伝統的で地味である。どうも当

今の一般的イラン人の美的嗜好とは若干違う。そこで、「どうしてアラビア語のコーラン章句を作品にするのですか」と先生や他の書道家に尋ねたことがある。その理由としてひとつは、イラン国内の官庁・公共施設、宗教指導者が顧客となっているとのこと。さすがは「イスラーム体制」である。もうひとつは、ドバイ、カタールやサウジアラビアなど、湾岸のお金持ちが高値で買ってくれるとのこと。なるほど納得である。私の先生も、急に教室を休んだかと思ったら、ドバイに行っていたことが何度かあった。遊びではなくて、「商談」のためだったようだ。

千数百年の歴史をもつイラン人の愛する書道も、機敏に当今の政治・経済事情を反映し多様な姿を見せてくれるようである。「二度書きOK」以上に、ずっと奥が深いことは間違いない。